

日本看護歴史学会 會報

日本看護
歴史学会
第57号
2012年2月1日

意志決定の可否を評価する歴史の事実

日本看護歴史学会理事長 川嶋みどり



2011年の3月11日の大震災と引き続く原発事故は、決して忘れることのできないできごとになりました。メディアを通じて流される刻々の現地の状況は、被災地の暮らしや放射能汚染の恐怖に悩む人々を映し出しました。救護班や医療班の活動、善意の各種ボランティアの動きも報じられました。でも、中長期を視野に入れた支援策は残念ながら未だ具体化されていず、仮設で過ごされる方たちの健康が案じられます。

一方、看護のあり方を根本的に揺るがしかねない「看護師特定能力認証制度骨子(案)」が厚労省から提示されたのも2011年掉尾のことでした。会員のみなさまの関心は如何でしょうか。「保助看法の中に、①特定の医行為が診療の補助の範囲に含まれることを明確化し、②その実施方法を看護師の能力に応じて定める」というものです。

本学会もその一員である日本看護系学会協議会の役員会では、度重なる論議を経てこの認証制度骨子(案)に関する法制化は時期尚早であるとの見解を厚労省に示しましたし、日本医師会を始めチーム医療を構成する他の医療職種団体も法制化に対する疑問を発表しました。日本看護協会は、この法制化の推進を24年度重点政策として位置づけています。

大震災後の復興策や放射能被害への対処の如何は、これからの国の命運にかかっていると

言える問題で、まずは3.8兆円という莫大な予算が、どのように適切に使われて行くかが問われています。また、新たな看護師の認証制度は、戦後、先輩たちが築いてきた看護の自立性を脅かすものとさえ言えます。それは、本来医師が行うべき医行為を医師の指示のもとで代行することを法律で認めようというものだからです。

ここに上げた2つのことは、決して別のものではなく、何れも『社会保障・税一体改革案』というこれからのケアのあり方に深く関連しています。将来に禍根を残さないために、今、生きている者の責務の重さを自覚する必要があります。

たとえば、現地の看護師とともに訪ねたある仮設住宅群で実感したのは、住居の構造やスペースは画一的であっても、そこに住む人々の被災体験をはじめ背景の多様さでした。かれらと向き合いきめ細やかな交流によって語られる内容の1つ1つが何と個別性がある重みがあったことでしょう。事情はそれぞれに違っても、そのできごとを正確に記述して残すことの大切さを実感しました。

また、看護師の認証制度案に対しても、ある雑誌で誌上ツイッターを募集したところ賛否両論が積極的に寄せられました。リアルタイムでの貴重な記録になることは間違いありません。時々の意志決定のレベルは、ごく小さな日常のできごとから国レベルの問題まで、さまざまであることはいまでもありません。ただ、歴史が時々の意志決定の可否をめぐる尺度になり得ることを思うと、看護歴史研究者として何をなすべきかが見えて来るのではないのでしょうか。

みなさまの実りある看護歴史研究を期待して、年頭のご挨拶に代えさせていただきます。

日本看護歴史学会第25回学術集会を終えて

第25回学術集会会長 仲里 幸子

このたび、日本の最南端の沖縄県で日本看護歴史学会第25回学術集会を無事終了することができました事は、会員の皆様をはじめご参加くださいました多くの皆様のご支援とご協力のお陰だと深く感謝し、心からお礼を申し上げます。

第25回学術集会は離島県で開催される学会のため、参加者数について私たちは心配しておりました。しかし、沖縄県外87人、沖縄県内94人の方々が参加され、“歴史を掘り起こし明日の看護を拓く”をテーマに無事に開催することができました。口演12題、示説29題の発表をはじめ、交流セッション5題、理事会展示1題、ワークショップ・分科会1題、どの会場も盛況でした。ここにあらためまして、会場を提供くださった沖縄県立看護大学の学長をはじめ大学の教職員及び学生のボランティアの皆様、会場の準備、運営、事後処理等々にご協力頂きましたことに感謝いたします。

日本の中で、沖縄県は、1945年第二次世界大戦で唯一地上戦が行われた県です。多くの生命を失い、焦土化した中で日本から切り離され、米国の施政権のもとで1972年5月15日の日本復帰までの27年間、沖縄県は他の都道府県とは異なる歩みをして参りました。今年、日本復帰40周年を迎えますが、現在でも国会で沖縄の基地問題が取り上げられていることは周知のことと存じます。

学術集会の初日には、石川秀雄先生（学校法人嘉数学園）に「米国施政権下における沖縄の行政機構と法制度の変遷」についてご講演頂きました。戦後27年間、沖縄は、米国の施政権下であって、日本本土の政治、行政から切り離され、独自の道を歩まされてきました。石川先生は、沖縄の日本復帰までの戦後27年間の歩みについてお話下さいました。参加された皆様には、沖縄についての理解を深めて頂けたと思います。

学術集会二日目の教育講演は、仲本和彦先生（公財 沖縄県文化振興会）による「記録なくして歴史なし—アーカイブスの重要性とその活用について—」でした。仲本先生は、米国の公文書館で長年、米軍の直接統治下にあった沖縄関係資料等を整理し、沖縄に送付する重要な仕事をしていらっしゃいました。今回、統治者側のアーカイブスについて、分類方法から活用方法までをご講演下さいました。講演後、多くの方々が「アーカイブスとか公文書館を知ることができた」等、お話ししているのを聞き、ホッとしました。

特別セッションでは、宮良ルリ先生（ひめゆり記念財団理事）が、「沖縄戦における女子学徒隊の体験から」というテーマで、沖縄戦の生き残りの証言者の一人として、ご自身の体験から、人々に“平和と命の教育”の大切さについて語って下さいました。

学内食堂で開催された懇親会にも、多くの方々が参加して下さり、様々な交流が生まれました。特に、名桜大学の学生の琉球舞踊や参加者全員で踊ったカチャーシーは疲れを癒してくれたのではないのでしょうか。

今回、学術集会実行委員やボランティアの協力により、学術集会の決算額の一部を日本赤十字社沖縄県支部を通して東日本大震災義援金として、また一部を日本看護歴史学会にも寄付をさせて頂きましたことをご報告いたします。なお、今回の学術集会について、地元新聞2紙が記事を掲載しましたことを、ここに併せてお知らせいたします。

※なお、第25回学術集会の会計報告は、3月発刊予定の日本歴史学会学会誌第25号に掲載されます。

2011年度 第9期理事・監事

(2011年4月1日～2014年3月31日)

担当	氏名	
理事長	川嶋みどり	理事
副理事長	芳賀佐和子	理事
編集委員会	田中 幸子	理事
	名原 壽子	理事
企画会報/広報委員会	小田 正枝	理事
	鷹野 朋実	指名理事
研究活動推進委員会	滝内 隆子	理事
	丸山マサ美	理事

担当	氏名	
情報システム委員会	日下 修一	理事
特別委員会	藤村 龍子	理事
事務局	庶務	川原由佳里 理事
	会計	山崎 裕二 理事
		樋野 恵子 指名理事
監事	岡山 寧子	
	高橋 みや子*	

*『日本の看護120年』改訂

第26回学術集会の開催について

第26回学術集会企画委員 川原由佳里

第26回学術集会は、2012年8月26日（日）、27日（月）日本赤十字看護大学（東京）にて開催します。学術集会長は川嶋みどり先生、テーマは「被災の教訓から改革へ—私たちは何を伝えるのか—」です。

企画委員会では、それぞれが看護の歴史研究者として、今回の東日本大震災の被災とそれに続く原発事故の経験にどのように向かい合うか、そして将来の看護にどう活かすべきかを自問自答しながら、徐々に学術集会としての形を浮かび上がらせつつあります。

過去、看護が選んできた道のりと、その結果としての現代の看護のありようを知れば、看護が社会の動きとは無関係ではなく、むしろそれらに大きく影響を受けてきたことに気づきます。この影響の受けやすさは、人々のニーズに応じる職業であればこそ、将来も看護が引き受けねばならないものです。そして社会が大きく変化しつつある今だからこそ、看護の「現在」を記

録し、将来の方向性を議論し、改革につなげることが強く求められているのだと思います。

テーマに沿って被災地で活動した看護職、また被災地まで出かけて活動した看護職にもご参加いただく予定です。それと同じように、災害のみならず、看護の歴史の探求を通じて、看護学の「現在」についてみなさまと議論を深めたいと思います。ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。

当日は、日本赤十字看護大学の史料室もご案内したいと思います。史料室は、明治23年からの看護婦養成に関する資料を中心に収集、整理、保存し、閲覧などの利用にも供しています。本学に伝承、寄贈・寄託された貴重な一次資料とともに、歴史資料の保存方法（空調管理、駆虫、酸化防止策など）や利用方法（電子化、データベース化、閲覧方法など）もご覧いただけます。是非お運び下さい。お待ちしております。

五史学会合同例会に参加して

12月10日、五史学会合同例会が開催されました。

演題は1.お玉が池種痘所あれこれ(深瀬泰旦先生)、2.切手で辿る薬学の歴史(平林敏彦先生)、3.占領期における日本の看護改革～保健婦助産婦看護婦法の改正をめぐる～(田中幸子)、4.「口歯類要」における口歯の意味的考察(西巻明彦先生)、5.新たに判明した忠犬ハチ公の死因について(中山裕之先生)の順に発表が行われました。日頃はなかなかお聞きで

山形大学医学部看護学科 田中 幸子

きない様々な領域の歴史研究に触れることができました。

また、私の発表では、薬剤師の場合はこうなっているが、看護師の場合はどうか、この部分は何をどのようにして調べたのか等々、たくさんの質問とご意見をいただきました。歴史が大好きな方ももちろんですが、研究をどう進めているのか悩んでいる方にとっては、歴史研究を理解する上でとても貴重な例会だと思います。ぜひ、皆様もご参加ください。

新入会員紹介(敬称略)

* () 内は会員番号 平成23年6月～平成23年12月入会

檜原登志子 (11014)	椿 祥子 (11015)
佐藤 和子 (11016)	川北 敬子 (11017)
佐藤 政美 (11018)	川村 晴美 (11019)
竹下弥矢子 (11020)	桑江沙耶香 (11021)
吉川千恵子 (11022)	玉城 清子 (11023)
島野 裕子 (11024)	河内 美江 (11025)
穴沢 良子 (11026)	

【お詫びと訂正】前号の新入会員紹介で伊藤知美会員(10044)のお名前が間違っていました。正しくは伊藤友美会員でした。ここに訂正しお詫び申し上げます。

お知らせ

■事務局から

平成23年度会員動向(平成23年12月15日現在)

1. 会員数(特別会員1名を含む)	353名
2. 入会者数	26名
3. 退会者数	9名

会費納入のお願い

平成24年度会費(6,000円)は、この会報と一緒に送りした払込取扱票に必要事項をご記入の上、郵便局からご入金ください。なお、平成23年度や22年度の会費を未納されている方は未納分も含めてご入金ください。3年間会費滞納の場合、退会となり会員資格を失いますのでご注意ください。

所属・住所変更や退会の場合

この会報と一緒に送りした変更届や退会届(本会ホームページからもダウンロードできます)を事務局にご提出ください。

学会誌投稿論文の送り先

投稿予定の会員は、事務局ではなく、〒990-9585 山形県山形市飯田西2-2-2 山形大学医学部看護学科 田中幸子(日本看護歴史学会誌編集委員会)宛にお送りください。

学会誌バックナンバーの販売

事務局が保管している学会誌と学術集会講演集のバックナンバーを会員・一般の方に販売します。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

編集後記

震災から時間が経過し、本当のニーズに合わせた継続的な支援について考えさせられているこの頃です。

歴史会報57をお届けいたします。日本看護歴史学会第9期理事(13名)・監事(2名)が決定し、川嶋みどり新理事長のもと、新体制でスタートいたしました。新理事長の年頭所感、第25回学術集会の報告、そして理事・監事とその役割など掲載しています。

(会報担当:小田正枝・鷹野朋実)

日本看護歴史学会会報 第57号

企画・編集 小田 正枝(国際医療福祉大学)
鷹野 朋実(日本赤十字看護大学)

発行責任者 山崎 裕二(日本赤十字看護大学)

印刷 有限会社 新和印刷

事務局 〒150-0012

東京都渋谷区広尾4-1-3

日本赤十字看護大学

山崎 裕二

TEL 03-3409-0613

e-mail yamazaki@redcross.ac.jp

川原由佳里

TEL 03-3409-0185

FAX 03-3409-0589(代表)

e-mail kawahara@redcross.ac.jp

学会HP <http://plaza.umin.ac.jp/~jahsn/>